



2月号

ひだまり

今月のエッセー

節分



二月を代表する行事の一つに節分があります。節分といえばやっぱり豆まき！ルンビニ合掌苑でも、「豆まきは行われませんでしたか？」

私の実家では、毎年家族そろって豆まきをしてきました。その時の鬼役は決まって父親です。鬼のお面をかぶった父親が部屋に入ってくると、兄弟が一丸となって豆をぶつけていました。そして最後に、それぞれの部屋の窓から豆をまきます。その時のセリフはやっぱり、

「鬼は外、福は内」

この決まり文句を力一杯叫んで豆をまきます。

編集後記



月日が流れるのは早いもので、私が初めて皆さんとお会いし、もうすぐ一年が過ぎようとしています。また、今年度の「ひだまり」も今月号が最後の発行となりました。

毎月様々なコーナーで、わかりやすく、そして楽しんでいただけることを目指してきました。来年度からは新しいコーナーを設け、より一層面白い機関誌にしていきますので、宜しくお問い合わせ致します。

暦の上では春ですが、寒い日が続いております。体調管理にはくれぐれもお気をつけ下さい。四月にまた皆さんの元気なお姿を拝見できるのを楽しみにしております。

◆ 國生徹雄

発行 曹洞宗総合研究センター教化研修部門

〒一〇五・八五四四

東京都港区芝二・五・二曹洞宗宗務庁内

☎〇三・三四五四・六八四四

「ぶったにゃんのひだまり仏教クイズ」楽しんでいただけましたか？

来年度も楽しい「ひだまり」をお届けしたいと思っておりますので、

ご要望があれば何でもお伝え下さい。一年間ありがとうございます。

ぶったにゃんのひだまり仏教クイズ



一月号の答え ②番

正解は「仏道をならふというは、自己をならふなり。」でした。この言葉は、道元禪師が残された『正法眼蔵』現成公案の巻の一節です。

「仏の道を学ぶというのは、自己を学ぶことである」

仏教を学ぶというと、お経は漢字ばかりで難しく感じ、縁遠いものと思われるってしまう方もいるかもしれません。しかしその本質は、この「私」とはいったい何なのかを明らかにすることにあります。仏教は決して、私たちの日常生活から遠いものではないのです。

私たちは人生を歩むことで様々なことに気づかされます。その一つ一つの気づきが仏様の教えを学ぶことでもあるのです。

特別企画『さよなら三年度生』



ついに、この日がやってきてしまいました。三年間はあっという間ですね。皆さんに初めてお会いした日から少しずつ月日を重ね、今月でルンビニ合掌苑を「卒業」します。いつも優しく法話を聞いてくださったり、楽しくレクリエーションで遊んだり、また、昼食の時に様々なお喋りで親しんだり、思い返せば今までとても温かい時間を過ごさせていただいたと改めて感じております。私は、ここを卒業した後も変わらずに精進してまいります。皆様のご健康とご多幸をいつまでも祈っております。三年間本当にありがとうございました。

◆大澤香有 (おおさわ かうゆう)

暖かな風と日差しが降り注ぐ三年前の春。初めてルンビニ合掌苑を訪れた日のことを今でもはっきりと覚えています。その日は御詠歌の担当で朝から緊張していました。しかし、皆さんの溢れんばかりの笑顔が私の緊張した気持ちを一気に吹き飛ばしてくれました。

それからというもの、ルンビニ合掌苑を訪問することが楽しみでしかたありませんでした。特に楽しくお話をしながらの昼食は一生の思い出です。これからも皆さんと過ごした三年間の思い出を胸に精進してまいりたいと思います。本当にありがとうございました。

◆堀江紀宏 (ほりえ きのひろ)

いろんな仏様

『阿弥陀如来』

今回は「阿弥陀さま」でご存知の、阿弥陀如来の紹介です。『無量寿経』というお経では、阿弥陀如来はお釈迦様と同じインドの王子として生まれ、世自在王仏のもとで出家をしたと説かれています。阿弥陀は、「アミターユス」と「アミターバ」という両方の言葉を音写した言葉です。「アミターユス」は計り知れない光明、「アミターバ」は計り知れない寿命という意味を持ちます。阿弥陀如来は、永い時の中、数えきれないほどの世界を慈悲の光で照らしている、時間や空間といったものの制限を受けない救済の仏様ということなのです。阿弥陀如来は「あみだくじ」の由来の言葉でもあるように、日本でも古くから信仰され、今でも変わらずに私たちを見守っていてくれる仏様です。

中野太秀 (なかの たいしゅう)



ひだまり

ご当地グルメ



愛知県より 『八丁味噌』



今回は私の出身地である愛知県、岡崎市の名物中の名物「八丁味噌」をご紹介します。八丁味噌の特徴は酸味・渋味の効いた独特の味。味噌煮込みうどんとの相性は抜群です！

この八丁味噌は三七〇年もの長い歴史を持ち、今でも塩・大豆・水のみで作られています。大豆を蒸して麴を作った後、六トンもの重さがある縦横一八〇センチの巨大な木の桶の中で約二年間熟成させて完成となります。

ここで注目してほしいのは桶に積む石。「石には顔がある」といわれ、その石を一人前に積むのには十年かかるそうです。

また、丸石を約二百個、計三トンもの石を積み上げるのですが、なんとその石、江戸時代から脈々と受け継がれてきた石なのだそう。これはもう美味しくないわけがありません。

岡崎の伝統と技術の味を是非ご賞味下さい！ ◆畔柳公潤 (畔柳 公潤)